『敦煌寫本研究年報』第十號（2016.03）69-87 頁

羅振玉舊藏『新定書儀鏡』斷片の綴合

山口正晃

はじめに

敦煌文獻を取り巻く環境は近年激變し、嘗ては圖版が見られなかったもの、あるいは目錄すら見られなかったものが、容易に目睹できるようになった。その結果、各方面において研究が格段に深化している。敦煌文獻はその大半が斷片であるため、斷片どうしを綴合して原狀を復元するという作業もまた研究者の大きな關心を集めてきたが、この方面においてもまた目覺ましい成果が擧げられている。

本稿では、羅振玉舊藏の『新定書儀鏡』斷片を中心として、これと接續する斷片が近年の情報公開によって數點確認されたため、これらをあわせて綴合し、原狀の復元案を示してみたい。

一、各斷片の概觀

本稿で扱うのは、杜友晉『新定書儀鏡』の斷片である。この寫本は總計 12 種確認されているが［山本 2012］［山本 2013］、同一寫本と認められているのは散 0676（20 點の斷片）、上圖 18、ZSD076、羽 569 の 4 種である［山本 2013］。これらの中、散 0676 の斷片がほぼ接續することは既に『書儀研究』で指摘され[1]、また、上圖 18 が羽 569-2 と接合することは山本氏にすでに言及がある[2]が、いずれも具體的な復元案は示されていない。

---

[1] 369 頁に「（辛）≪貞松堂西陲祕籍叢殘≫中的書儀斷片、≪敦煌遺書總目索引≫著錄爲散 0676 號；屬杜氏≪書儀鏡≫的殘頁共有二十一片、羅氏沒有按順序排列、參照伯 3637（甲卷）・伯 3849（乙卷）、可以把這二十一殘片大致拼合。」とある。筆者は 20 點の斷片が接合すると考えているが、趙氏は 21 點と數える。趙氏は具體的な復元案を示していないので、どのように數えて 21 點となったのかは不明である。

[2]［山本 2012］［山本 2013］には同一寫本と述べるだけで接合のことは記されていないが、山本氏は清華・京都 2011 年聯合漢學工作坊主催「文學・宗教・藝術與物質文化」（臺灣・國立清華大學、2011 年 11 月 24 日）での口頭報告「杏雨書屋藏幾件書札研讀札記」において、この兩寫本が接合することを指摘している。

散 0676 というのは、『總目索引』の「四、敦煌遺書散錄」の中、「8、羅振玉藏敦煌卷子目錄（依貞松堂藏西陲祕籍叢殘）」に散 0676 として記載される「書儀殘葉 書儀斷片」であり、『祕籍叢殘』に圖版が掲載されている（以下、本稿では貞松堂本と呼ぶ）。全部で 20 點の斷片が同一寫本である。ちなみにこれらの中 3 點のみ、現在は中國歷史博物館に所藏されていることが判明している（歷博 52-2、歷博 52-3、歷博 53）が、他は現在の所藏先は分かっていない。

ところで『祕籍叢殘』には寫本番號が特に附されていないため、20 點の斷片の一つ一つを指示する何かしらの基準をいま便宜的につける必要がある。今、『祕籍叢殘』の内容を見るうえで最も簡便なのは恐らく影印復刻版として出版された『敦煌石室遺書百廿種』（『敦煌叢刊初集』第 6〜8 册、新文豐出版公司、1985 年。『祕籍叢殘』は第 7 册所收）であろう。これに基づいて以下、本稿で便宜的に使用する番號を決めておきたい。基本的に一頁につき上下 2 點の圖版が掲載されているので、各頁の上、下の順に番號を振ってゆく。まず、383 頁では 3 點の圖版があるが右側の 1 點は關係ないため除外して、左側の上段を①、下段を②とする。以下、384 頁の上段が③、下段が④、というようにして順次番號を振ってゆき、389 頁の上段が⑬、下段が⑭、となる。そして 390 頁には 4 點の圖版が載せられるが、上段の右を⑮、左を⑯、下段の右を⑰、左を⑱とする。最後に 391 頁には上段に一點、下段に二點の圖版を載せるが、下段の左側は本稿での檢討對象外であるため、上段を⑲、下段の右側を⑳とし、これで計 20 點の斷片を指示することとする。

貞松堂本以外についても概略說明しておくと、上圖は言うまでもなく上海圖書館のもの（以下、上圖本と略稱）、ZSD は中國書店所藏のもの（以下、中國書店本と略稱）である。いずれも近年になって初めて情報が公開され、その存在が確認されたものであり[3]、入手經路や來歷については一切不明である。

最後に羽 569（以下、羽田本と略稱）は、これも近年になって情報が公開された大阪の武田科學振興財團杏雨書屋所藏敦煌祕笈のコレクションで、2010 年に大阪で開かれた第 54 回杏雨書屋特別展示會でも出展され、このとき配布された圖錄にも掲載されているが、それによれば清野謙次の舊藏品であり、寸法は縱 14cm と記す。本斷片では文章そのものは天地ともに缺いていないにも關わらず、縱の寸法が通常の寫本よりかなり小さいのは、後に記すように、三段に段組みした寫本の一段分であるからに他ならない。またこの羽 569 というのは二點の小斷片を掛軸仕立てにしたものであるが、上段は『現在賢劫千佛名經』という佛名經の斷片であり、下段に配される書儀斷片が本稿で取り扱うものである。ちなみに羽 570 も

[3] 上圖本は『上海圖書館藏敦煌吐魯番文獻』（上海古籍出版社、1999 年）で、また中國書店本は『中國書店藏敦煌文獻』（中國書店、2007 年）でそれぞれ圖版が公開された。

同じく2點の斷片を一幅の掛軸に裝丁したもので、上には印沙佛が、下には『大乘法苑義林章』が配されるが、羽569と羽570の兩幅の掛軸は對になるものである。清野謙次舊藏書については高田時雄氏による論考がある［高田2006］。そこでは清野が羽田に讓渡する際の目錄が紹介されており、展覽會の圖錄でも指摘するように、この目錄の中の「敦煌小斷片四種二軸」とされているものが羽569・羽570に當たると考えられる。つまり、羽田の手に渡る前の段階で、掛軸に裝丁されていたということである。

本寫本の復元案を作成するうえで參考にしたのが『書儀研究』である。『書儀研究』ではPelliot chinois（＝以下、P.ch.と略稱）3637を底本として他の各寫本をも參照し、『新定書儀鏡』全文の錄文が示されている。ここで擧げた斷片群が該當するのは本錄文の336～356頁のおおよそ20頁分である。この該當部分は末尾の數行を除いて上下二段に分けられ、下段はさらに二段に分割される。言い換えると、全體として三段の段組みで構成されるが、均等な割り付けではなく、上段が他の二段に比して最も高く、中・下段がほぼ同等でなお且つ上段に比して低めに設定される。ただし末尾數行のみ、段拔きで書かれる。本稿末尾で示した復元案でも同樣の體裁が取られており、これが『新定書儀鏡』に概ね共通する體裁であったことが分かる。尚、上記したように貞松堂本については『書儀研究』において既におおよそ綴合できることが指摘されているが、具體的にどのような位置關係で接續するのかは示されていない。ここで「位置關係」として注意したいのは、上下の位置關係、すなわち上段・中段・下段の位置關係である。各段における前後關係は、錄文に從えば自ずと判明するが、上段・中段・下段相互の位置關係は寫本によってずれる蓋然性が極めて高い。從って、『書儀研究』の錄文のみに基づいて上下の位置關係を一律に決めることは出來ない。本稿で復元案を示す意義は、一つにはこうした上・中・下段の位置關係も含めて綴合狀況を具體的に示すこと、いま一つは貞松堂本のみならず、近年の情報公開によって新たに指摘された3種の寫本をも併せてそこに示すこと、ということになる。

二、復元案の作成

各斷片の內容を、『書儀研究』の錄文に照らして該當する箇所を示したのが【『新定書儀鏡』斷片と『書儀研究』の對應表】である。上述したように、復元に當って最も重要になるのが、上段・中段・下段の位置關係である。この點、一覽表を見れば分かるように、上段と中段、もしくは中段と下段のように二段にまたがる斷片が

いくつかあるため、大いに參考になる[4]。特に、中段と下段にまたがるものには上圖本・貞松堂本の②・③・⑩・⑪・⑬・⑮など比較的多くあり、從って中段と下段の位置關係はほぼ確定できると言ってよい。これに對して、上段と中段にまたがるものは貞松堂本の①と⑦の2點のみであり、確定させることが難しい。ただし、末尾の段拔きで書かれている箇所に着目すると、貞松堂本の④と⑲がそれぞれ、上段と末尾および下段と末尾にまたがっているため、ここと貞松堂本の①⑮を兩端として確定させると、その中間部分についてはかなりの確實性をもって復元することが出來る。裏を返すと、そこより前の部分、具體的には上段でいえば羽569および貞松堂本の⑳、中・下段でいえば上圖本および貞松堂本の⑬に該當する部分については、上段と中・下段の位置關係は一定の留保をつけなければならない[5]。

【『新定書儀鏡』斷片と『書儀研究』の對應表】

寫本番號	《敦煌寫本書儀研究》
羽569	上段／336頁5行～338頁10行
上圖18	中段／336頁10行～338頁4行 下段／336頁11行～337頁8行
ZSD076	上段／347頁9行～348頁12行
貞松堂①	上段／340頁12行～342頁6行目
	中段／342頁2行
貞松堂②	中段／347頁6行～348頁2行
	下段／345頁4行（有錯誤）～347頁2行
貞松堂③	中段／345頁6行～346頁13行 下段／344頁9行～346頁（有錯誤）
貞松堂④	上段／352頁4行～356頁1行 末尾／356頁1行
貞松堂⑤	上段／345頁6行～347頁8行
貞松堂⑥	下段／347頁3行～349頁3行
貞松堂⑦	上段／342頁7行～345頁4行 中段／343頁7行～343頁11行
貞松堂⑧	下段／349頁4行～350頁9行
貞松堂⑨	上段／350頁1行～352頁3行
貞松堂⑩	中段／345頁2行 下段／343頁3行～344頁8行
貞松堂⑪	中段／353頁7行～354頁13行 下段／351頁1行～352頁4行
貞松堂⑫	中段／350頁6行～352頁9行
貞松堂⑬	中段／339頁2行～341頁9行 下段／338頁13行～340頁8行
貞松堂⑭	中段／345頁4行～347頁1行
貞松堂⑮	中段／341頁10行～342頁8行 下段／340頁10行～341頁6行
貞松堂⑯	中段／348頁10行～350頁5行
貞松堂⑰	中段／344頁5行～345頁3行
貞松堂⑱	上段／348頁13行～349頁12行
貞松堂⑲	下段／352頁5行～354頁2行
	末尾／356頁3行～356頁12行
貞松堂⑳	上段／340頁3行～340頁11行

こうして復元したのが、本稿末尾の復元案である。見開き左側の頁に上段を、右側の頁に中・下段を掲載し、寫本の全體像を把握しやすいよう配慮した。文字については基本的に『書儀研究』の錄文に依りつつ、それほど多くはないが文字の異

[4]この表を見れば、『書儀研究』の錄文と、本稿で取り上げる斷片群とでは、上下の位置關係の一致しない場合があることは明白である。

[5]たとえば、羽569の圖版を確認すると、13行目「姪生亡弔弟妹兄姉書」の下に、文字の殘畫らしきものが極く僅か見える。筆者はこれを、復元案の中段14行目行頭の「告」の字ではないかと考えるが、そうすると復元案ではおよそ2行分ほどではあるが、ズレがあることになる。

同がある場合には特に注記することなく改めてある[6]。尚、重複記號については文字として起こす（例えば「悲"痛"」→「悲痛悲痛」）のが通例であるが、本稿では出來るだけ字數と行の長さを忠實に再現するため、半角記號の「"」を使用した。また改行について、確認できない箇所については大體前後の改行字數を參考とした。さらに行數について言えば、概ね、上段の方が中・下段に比して文字が大きく行間もやや廣めであるため、兩者の行數は一致しない。中段と下段はほぼ文字の大きさ・行間ともに同じであるが、いかんせん寫本であるために行數が完全に一致するわけではない。こうした問題については適宜、空白行を插入して對處した。こうして上段は空白行を含めて總計 131 行、中・下段は同じく空白行を含めて總計 150 行となっている。さらにその後に、末尾の段拔き部分が 8 行分ある。この部分は當然、見開き左右の頁で行數は對應しており、文章もつながっている。また印刷レイアウトの都合上、一枚の斷片が頁をまたぐ場合があるが、その場合は矢印を附して示した。

三、餘話

さて、こうして復元案を作成してみて疑問に思うのが、なぜ、この寫本は 20 點以上にもおよぶ斷片として現在に傳わっているのか、ということである。考えられるのは、もともと斷片という形で藏經洞に封入された、言い換えると 20 世紀になって發見される前から既に斷片となっていた場合と、いま一つ、發見された後、何者かの手によって切斷された場合と、この二つの中どちらかしかない。言うまでもなく藏經洞發見の敦煌文獻の大半は斷片であり、前者の可能性も無いわけではない。しかしその場合、同一寫本の斷片がこれだけの數でまとまって殘されていたという事例を他に聞いたことはなく、その點でやや不自然な印象を免れない。やはり、後者の可能性が極めて高いと言ってよいだろう。ここではこの點について若干の考察を加えたい。

まず單純に外形的特徵から指摘すると、復元案を一覽すれば明らかなように、こ

[6]ただし 1 點のみ、大きな異同があるためここに注記しておく。『書儀研究』下段の、345 頁 10 行目から 346 頁 3 行目まで、「夫亡舅姑夫及父母答弔辭」という題のつけられた本文について、甲本（＝ P.ch.3637）は闕くため乙本（＝ P.ch.3849）と丙本（＝ P.ch.5035）によって補った、という注記がある。斷片群の中でこの箇所に該當するのは貞松堂本の②と③であるが、一覽表にも記したように、やはり混亂が見られる。具體的には、趙氏が乙本と丙本によって補ったとする部分の最初の四字「禍不出圖」は本斷片（貞松堂本③）も同じであるが、その後は、實は直前の「妯娌父母亡及夫亡辭」の内容を繰り返している。復元案の行數で示せば、下段の 75〜81 行目が問題の箇所であり、この部分が、直前の 66〜72 行目と全く同じ内容になっており、『書儀研究』の甲本・乙本・丙本のいずれとも異なっている。

れらの斷片群は上下は各段毎に切斷され、左右は文例のちょうど區切れの箇所で切斷されているものが多い[7]。とすると、誰かが意圖的に切斷した可能性が高いということになる。さらに言えば、切斷面が極めて直線的であるものも少なくない。つまり、この多くの斷片群は決して自然に破斷したのではなく、誰かが何等かの意圖をもって切斷したものとみて、まず間違いない。

では、いつ、誰が、どのような目的で切斷したのか。假にこれを、9〜10 世紀の人が切斷したとする。その目的として考えられるのは、一つは補修用紙として再利用するために切斷したということ。しかしそうであれば、内容の區切りを踏まえて切斷する必要は全くない。では、文例集の必要な箇所だけを携帶用に切り取ったのか。しかし、本斷片群は確かに上述したように内容の區切りに從って切斷されている傾向が顯著に認められるが、但し、そうなっていない斷片もままある[8]。そもそも文例集はあらゆる事例を網羅して初めて「文例集」として機能するのであって、切り取ってしまえばもはやその價値はない。こうした點を勘案すると、やはり當時の人が切斷した可能性は限りなく低いように思われる。

これに對して、現代において誰かが切斷したとすると、どのように考えられるか。切斷してバラ賣りすることによって小錢を稼ごうとした可能性が充分考えられるであろう。その場合、文字列が全く意味をなさない斷片よりも、内容として一定の意味を讀み取れるものの方が、當然より高い値がつけられるであろう。何等かのルートでこの寫本を入手した人物は、なんとかより多く稼ぐために、この寫本が三段組の構成となっていることに着目して、ある程度の意味内容のまとまりを保った狀態で切斷するということを思いついたのではなかろうか。たとえば、羅振玉自身が次のような言葉を殘している。

> 明年（＝宣統 2 年［1910］；筆者注）、由署甘督毛公遣員某運送京師。既抵春明、江西李君與某同鄉乃先截留於其寓齋、以三日夕之力、邀其友劉君・婿何君及揚州方君、拔其尤者一二百卷、而以其餘歸部。…（中略）…方君則選唐經生書迹之佳者、時時截取數十行鬻諸市。故予篋中所儲、方所售外、無有也[9]。

これは、藏經洞に殘っていた敦煌文獻を北京に移送する際、李盛鐸をはじめとして劉廷深・何彦昇・方爾謙らが結託して優品を横領したという、惡名高き行爲につ

[7]特に上段の斷片にその傾向が顯著であることは一覽表を見れば分かることなので、紙幅の都合もあり、繁雜を避けるためここでは一々指摘しない。

[8]特に中・下段部分。これも一覽表を見れば分かることであり、一々指摘しない。

[9]羅振玉『後丁戊稿』所収「姚秦寫本僧肇維摩詰經殘卷校記［序］」（『羅振玉學術論著集』第十集下、上海古籍出版社、2010 年）

いて述べた部分であるが、注目したいのは中略の後である。「方君（＝方爾謙）は則ち唐の經生の書迹の佳なる者を選び、時時に數十行を截り取りて諸を市に鬻ぐ。故に予の篋中に儲うる所、方の售る所の外は、有る無きなり」と、方爾謙がまさしくそのような行爲を行っていたことを述べている。あるいはまた、

> 三年前、予曾從友人借觀是卷、令兒子福葆寫影。今乃得之市估手、初以後半二十八行乞售、亟購得之。復求前半、乃復得之浹旬以後。然末行尚有新割裂之迹、知尚有存者、今不知在何許、安得異日更爲延津之合耶。爰書以俟之。壬戌九月[10]。

とも述べ、三年前（1919 年）に「友人」（誰を指すのかは不明）から借りて見たことのある『老子義』殘卷が、「壬戌」の歳（1922）に賣りに出されていたので購入したが、前半・後半・末尾に三分割され、結局末尾は手に入れることが出來なかったことが記されている。このように、かなり早い段階から敦煌文獻を「切り賣り」することが横行していたのは明らかであり、本斷片群もそうした文脈で捉えて大過ないのではないか。

ちなみにいま引用した中の前者では、羅振玉は當初、方爾謙がこうして切り賣りしたものしか所藏していなかった、とも述べられている。つまり羅振玉はそれらを購入していたわけである。「經生の書迹」という表現を素直に解釋すれば寫經を指すと考えられるが、果たして寫經だけだったのか。現在、羅振玉が最も早く 1910 年に入手したと考えられている敦煌寫本は、『春秋後語秦語』殘卷と『太公家經』、それに『大雲夢想經』である［林 1988：2］。いま問題にしている書儀もここに含まれるかどうか、斷定はもちろん出來ないが、その可能性も考慮に入れておいてよいだろう。

羅振玉は自分で購入したり、あるいは知人から借りたりして目にした敦煌文獻について多くの跋文を書いており、購入したものについてはいつ、どこで購入したかが書かれていることがある。そうした情報に基づいて［林 1988：2-3］は、羅振玉が敦煌文獻を入手した時期として 1910、1913、1922、1924 年の四つを擧げる。殘念ながら、この書儀斷片について羅振玉は一切文章を殘していないので實際のところは不明であるが、恐らくこの書儀斷片も、この四つの時期のどこかで入手した蓋然性が高い。

いずれにせよ、本稿で取り上げた 23 點の斷片は、その出所は一つで、現代人の手によって切斷されたと考えるのが最も自然である。特に、羅振玉が 20 點もの斷

[10]羅振玉『松翁近稿』所収「老子義殘卷跋」（『羅振玉學術論著集』第十集上、上海古籍出版社、2010 年）

片をまとまった形で所藏していたのは、別々に手に入れたとするよりも一括して入手したと考えるべきである。そして、他に三點の斷片が三つの機關によって所藏されていることから考えると、これら斷片が文字通り「切り賣り」されていたときに、敦煌文獻の流失に心を痛め、私財を擲って蒐集に努めていた羅振玉がそれを知り、賣れ殘っていたものを全て一括して買い取ったことが考えられる。あるいは、羅振玉が「全部」買い取ったと思っただけで、實は「賣主」はまだ數點隱し持っていて、後から小出しに賣ったのだろうか。

上述したように、上圖本と中國書店本の來歴は一切不明であるが、羽田本については清野謙次舊藏であることが分かっている。［高田 2006］によれば、1939 年作成の讓渡目錄と、そのちょうど十年前、1929 年刊の『昭和法寶目錄』に記載される清野コレクションの内容[11]とで所藏點數が倍以上に增えている。そして羽 569・570 を指すと考えられる「敦煌小斷片四種二軸」は『昭和法寶目錄』には記載されていない。ということは、これは 1929 年から 1939 年までの十年の間に新たに清野コレクションに加えられたものということになる。ここで、羽 569・570 が羽田に讓渡された時點で既に掛軸に裝丁されていたことに注目したい。清野自身、自分の所藏する敦煌寫本を切り取って掛軸に裝丁して知人に贈っていたことが［岩本 2013］で指摘されている。從って清野が入手した後、羽田に讓渡する前に裝丁した可能性もある。ただ、たとえば書道博物館藏の中村不折舊藏本に含まれる王樹枏舊藏本のように、中國において裝丁されたものが日本に流入した例も決して珍しくはない。しかも、『敦煌祕笈』に掲載される圖版で確認すると、羽 569・570 の裝丁は、清野舊藏の他のもの[12]と明らかに異なる。清野が入手した時點で既に裝丁されていた可能性が高いように思う。とすると、清野の入手時期（1929〜39 年）ともあわせて考えると、最初の「賣主」（＝恐らく羅振玉が一括購入した人物）の手から清野に渡る間に、少なくとも一人の手は經由していた、その人物によって裝丁されていたことになる。こうした裝丁に着目して分析すれば、そのあたりの事情があるいはもう少し分かるかも知れないが、紙幅の都合もあり、本稿ではそこまで明らかにし得ない。

以上、本斷片群の流傳について若干の考察を加えたが、多くは根據の薄弱な推測に過ぎない。ただ、これらの出所が一つであったとすると、たとえば羽田本と貞松堂本⑳の間のように、本來はあったと考えられる斷片がいまだ見つかっていない。近年の情報公開の波の中で、こうした散逸してしまった斷片が更に發見されること、また貞松堂本も多くは行方不明のままであり、その現在の所藏先が判

[11]『總目索引』の「敦煌遺書散錄」にもこの目錄情報は転載されている。
[12]敦煌祕笈中に含まれる清野舊藏品については［岩本 2010］［高田 2006］參照。

明することを願ってやまない。

引用文獻（略稱）一覽

『書儀研究』　趙和平『敦煌寫本書儀研究』（新文豐出版公司、1993 年）

『總目索引』　商務印書館編『敦煌遺書總目索引』（商務印書館、1962 年）

『敦煌祕笈』　『敦煌祕笈・影片册』第 7 册（武田科學振興財團、2012 年）

『祕籍叢殘』　羅振玉『貞松堂藏西陲祕籍叢殘』（上虞羅氏印、1939 年）

【論考・中文】

林 1988　林平和『羅振玉敦煌學析論』（文史哲出版社、1988 年）

周 2010　周常林「羅振玉與學部藏敦煌文獻」（『敦煌學輯刊』2010 年第 4 期）

【論考・日文】

岩本 2010　岩本篤志「杏雨書屋藏『敦煌祕笈』概觀」『西北出土文獻研究』第 8 號、2010 年

岩本 2013　岩本篤志「大東急記念文庫藏敦煌文獻來歷小考」『立正史學』第 114 號、2013 年

高田 2006　高田時雄「清野謙次蒐集敦煌寫經の行方」『漢字と文化』9 號、2006 年

山本 2012　山本孝子「書儀の普及と利用――内外族書儀と家書の關係を中心に」『敦煌寫本研究年報』第 6 號、2012 年

山本 2013　山本孝子「敦煌吉凶書儀の言語に反映される社會環境」（京都大學學位申請論文、2013 年 12 月提出）

（作者は大手前大學総合文化學部准教授）

『新定書儀鏡』斷片群復元案

（上段）

001　　弟妹亡弔次弟妹書

002　不意凶衰汝　兄傾逝割裂拔氣與汝同懷

003　痛深春寒悲念何極此　耶孃萬福男女無

004　恙吾如常因人還遣此不慘愴不次大哥告某　月日

005　　大哥書至某所付某省　　封

006　　答書　　凶釁無常

007　次哥傾逝分裂拔氣貫割難任悲"痛"奈"何"

008　次哥年未居高冀保榮祿何圖忽嬰疾疹遘

009　此凶禍悲"痛"深"孟春猶寒伏惟

010　羽 569　次哥尊體動止康愈未由拜洩倍增悲戀謹附

011　疏慰慘愴不次某再拜　　月日

012　題如吉書與兄書

013　　姪生亡弔弟妹兄姊書

014　月日名頓首禍不出圖　某夭逝聞問傷悼貫

015　割難勝悲深　某乙盛年冀其成立何圖積善

016　無應奄遘此禍伏惟割裂慈愛痛"切"奈"何"孟

017　春猶寒伏惟次姊尊體動止萬福未由拜洩伏

018　增悲戀謹奉疏慰慘愴不次某再拜　　月日

019　謹　謹　上　　次姊座前　　某狀　　封

020　　答書　　不意凶衰

021　某夭逝分裂慈愛難以爲懷痛"深"某乙盛年

022　冀紹堂構忽焉夭歿悲慟無從春寒悲念何極

023　未即集洩但增悲哽遣此慘愴不次次姊告

024　　題如前　　月日

025　　父母弔子三殤書

026　不意凶衰　某乙夭逝悲痛貫割難以爲懷念汝輩

027　遭此凶衰悲痛何極某乙年雖幼稚冀其成

028　奄從物化痛割如懷奈"何"未即見汝但增悲念

029　遣書慘愴不次耶孃告

（中段）　　（下段）

三日小斂祭		001
維年月朔日孤子等敢昭	上圖 18	002
告于　亡考之靈某等不孝罪	弔後至祥禫已來經	003
深無狀罪深荼毒如昨奄及小	節辭	004
斂觸目貫割不勝屠楚敢	日月流速奄及祥制時云頗遷	005
少牢之奠伏惟　　尚饗	時序云奄經冬至冬節孝感罔極攀	006
	慕號擗哀痛奈何哀	007
七日大斂祭	苦奈何　　答云	008
維年月朔日孤子名等敢昭告于		009
亡考妣之靈某等不孝罪深禮制	日月迅速荼毒如昨奄及	010
隨没日月流速奄及大斂敢薦少	經祥制除禫云奄經禮制攀慕無及觸	011
牢之奠伏惟　尚饗	目崩潰不自死滅苟延視	012
堂上啓柩將葬祭	息酷"罰"罪"苦"	013
維年月朔日孤子名等敢昭	弔伯叔兄姉亡辭	014
告于　亡考妣之靈某等罪	凶故無常	015
逆深重禮制隨没龜兆告	賢叔傾逝貫割哀苦悲	016
吉將付玄宮敢薦少牢之奠	痛奈何	017
伏惟　尚饗	答云　凶故無常家叔	018
轜車出祭	傾逝悲"痛"罪"苦"	019
維年月朔日孤子名等敢昭	舅姨亡弔母辭	020
告于　亡考妣之靈某等不孝	凶釁無常　某舅傾逝	021
罪深重禮制隨没日月流速奄	割號楚悲"痛"奈"	022
及祖載轜車既駕將即玄宮	何"　13	023
敢薦少牢之奠伏惟　尚饗	答云不意凶衰汝舅	024
下柩祭	女婿亡弔親家翁母辭	025
維年月朔日孤子名等敢昭	不意凶變　某郎殞逝割	026
告于　亡考妣之靈某等不孝	裂慈愛悲痛奈何	027
罪深禮制隨没今以吉辰將就玄	不圖凶衰　某盛年殞逝次娘	028
宮謹薦少牢之奠伏惟　尚饗	不造忽爾孀居撫視孤	029
	遺悲悼痛苦	030

030　　題如吉　　月日

031　(20)　答書

032　月日名言禍出不圖　某乙夭逝悲痛貫割不可

033　勝任伏惟悲念奈何傷悼奈何季秋漸冷伏惟

034　耶孃尊體動止萬福即此某無横未由　侍奉

035　伏增悲戀謹奉白疏慘愴不次再拜

036　　彼此重服相與書

037　春寒不審氣力何似某乙悲釁可量(有事此任于下論)未由拜洩

038　倍增崩潰遣書荒塞不次孤子姓名頓首

039　(1)　　姓次郎　服前　　月日

040　罪逆深重不自死滅辱書倍增喪禮唯命早皈故府

041　爲要春寒惟　　動履友祐未即被洩但增悲仰(餘准前)

042　　重服内尋常相與書

043　春寒惟　動息友祐某荒釁可量辱書兼

044　致嘉記倍增悲悚因人還荒不次孤子姓名頓首

045　　次郎　服前　　月日

046

047　外族　弔答書一十二首

048　姑姨姉妹夫亡弔姑姨姉妹書

049　月日名言凶釁無恒　　姑夫■(妹夫云不意凶某郎殞逝)

050　傾逝聞問悲慟不能已已惟(妹云念汝)攀慕擗標

051　何可堪居哀"痛"奈"何"妹夫(妹夫云某郎)素無疾

052　疹冀保終吉何圖積善無伏遘此凶衰悲痛奈

053　何孟秋猶熱伏惟(妹云秋涼念汝無横此吾如常未即集洩但增悲望遣書不次々哥告某娘)

054　次姑動止友豫即此某蒙恩未由拜洩伏增悲

055　戀謹奉疏慰慘愴不次某再拜　題如内族兇書

056　(7)　　弔女婿遭父母喪書

057　月日名句凶釁無常　親家翁母傾逝奄棄榮

058　養聞問驚惻悲慟難勝想攀慕號擗荼毒

059　貫割哀"苦"奈"何"親家翁母年雖居高冀延眉

060　壽何圖奄遘凶釁丁酷罰哀苦奈何初伏毒熱

臨壙祭　　嫂亡弔父母及兄辭　031
維年月朔日孤子名等敢昭告　凶故無常　嫂傾逝弟婦　032
于　亡考之靈某等不孝罪深不　云新婦伏惟悲悼傷切悲"　033
自死滅將即幽壙尅用今日辰號　痛"奈"何"　034
天叩地不勝哀苦謹薦少牢之奠　答云　不意凶故汝嫂殞　035
伏惟　尚饗　逝男女偏露益增悲痛　036
037
延神祭　妻亡弔丈人丈母辭　15　038
維年月日孤子名等敢昭告于　禍出不圖次娘子傾逝悲　039
亡考妣之靈某等不孝深重禮制隨　慟貫割哀痛奈何　040
没謹奉神柩已即玄宮攀慕慈　答云　不意凶故次娘夭逝　041
顔不勝號絶謹奉靈柩還延謹　重疊相鍾撫視相對偏露　042
薦少牢之奠伏惟　尚饗　滿室何以爲懷痛"深"　043
春祭　女亡弔答女婿辭　044
維年月朔日孤子名等敢　不意凶衰次娘子殞逝貫　045
昭告于亡考之靈某等不　割悲楚痛"深"　046
孝罪深不能隨歿奄及春　當家薄福凶疊相鍾某盛　047
節不勝攀號敢薦甘新　年忽然夭逝撫視偏露痛"深"　048
伏惟　尚饗　新婦亡弔親家翁母辭　049
夏祭　凶故無常　050
維年朔日孤子名等敢昭告　新婦殞逝悲悼傷切哀苦　051
于　亡考之靈某等不孝　奈何　052
罪深不能滅亡玄象遄流奄及　答云不意凶衰盛年殞　053
夏節攀慕慈顔　逝男女偏露痛"深"　054
號天叩地不勝號絶敢　055
薦新醪伏惟　婦人弔辭八首内外及相識同　056
尚饗　17　057
秋祭　婦人弔婦人夫亡辭　10　058
維年月朔日孤子某等敢昭　凶疊無常　059
告于　亡考之靈某等不　某郎傾逝惟追慕擗　060
孝罪逆不勝□死亡日月　標荼毒貫楚哀痛奈何　061
遄流奄及秋節攀慕慈　答云　062
顔不勝貫割謹薦秋物伏　某郎盛年謂保終吉何　063
圖奄此凶疊男女孤遺　064
惟　尚饗　追慕無及觸目殞絶酷　065
罰罪苦　066

061 想　　某郎所履友立男女等友致某諸弊少理
062 未由造慰但增悲望謹遣疏慰慘愴不次姓名句
063 謹通　某郎至孝凶前　郡姓名白弔　封長封
064 答書取四海重喪書
065
066
067
068
069 弔女遭夫喪書
070 不意凶故　某郎殞逝聞之悲悼難以爲懷念汝
071 荼毒哀痛奈何　某郎年未居高謂保終吉
072 何期不祐遘此凶衰念汝孀居男女姑露撫視
073 相對哀痛奈何時寒念汝友立男女等友致
074 未由集洩但多悲念遣此慘愴不次耶孃告某
075 耶孃(有號任稱)白書至某所付某娘省　封
076 5 答書　　罪釁深重
077 某郎傾逝荼毒貫割痛深痛深某郎忽
078 嬰疾疹冀漸瘳損何圖不祐奄鍾此
079 禍追慕無及觸目號絶罪"苦"深"仲春
080 已暄伏惟　　耶孃尊體起居萬福未由
081 訴奉某月日告伏增悲戀謹奉白書荒
082 寒不次次娘再拜
083 ZSD076 題如前　　月日
084 新婦亡弔親家翁母書(答同女婿亦然注中攻訖)
085 禍出不圖　新婦夭喪(答云次娘夭逝)悲悼痛楚
086 不能自勝惟割裂慈愛去離骨宍哀"痛"
087 奈"何"(如答即于惟下云哀念苦痛)　新婦盛年冀典中饋
088 (答云次新婦盛年冀保侍執)何圖不造奄遘凶衰偏露
089 滿房難爲撫視惟哀念奈何春寒惟親家
090 翁母動靜友勝此某諸弊少理未由拜洩引領
091 悲望日夕無捨因使慘愴不次姓名頓首

冬祭　　妯娌父母亡及夫亡　　067
維年月日孤子名等敢昭告　　凶釁無常　親家翁母傾　③　068
于　　亡考之靈某等不孝　　背(或云尊府君 夫人云某郎)攀慕擗　069
罪深不孝罪深不能隨歿　　標貫哀楚痛苦奈何　070
玄運遄速奄及冬節攀　　答云耶孃年雖居高冀　071
慕慈顔不勝號絶謹以蒸祭　　延遐壽(夫釁云不意 凶某郎傾逝)追慕　072
惟　尚饗　　無反觸目無紀荼毒罪苦　073
　　永痛罪苦　074
祥祭　　夫亡舅姑夫及父母答　075
維年月朔日孤子名等敢　　弔辭　　禍出不圖　076
昭告于　亡考之靈某等　　凶釁無常　親家翁母傾　077
不孝罪深不能隨歿日月　　背(或云尊府君 夫人云某郎)攀慕擗　078
流速奄及大祥示人有無　　標貫割哀楚痛苦奈何　079
敢過禮割從禮制釋凶就　　答云　耶孃年雖居高　080
吉伏惟　尚饗　　冀延遐壽(夫釁云不意 凶某郎傾逝)　081
⑭　　追慕無反觸目無紀　082
　　荼毒罪苦永痛罪苦　083
遷葬祭　　弔舅姑遭父母辭　084
維年月朔日孤子名謹以少牢之　　凶釁無常　尊夫君大家　085
奠敢昭告于亡考之靈某　　崩背伏惟攀慕擗標　086
等不孝罪逆奄及安厝禮　　荼毒貫割痛苦奈何　②　087
制有限不敢觸違玄運遄　　答云　罪逆深重不自死　088
流奄經五載龜筮告吉今日　　滅攀慕無及觸目崩　089
吉辰謹啓慈顔不勝屠楚　　絶酷"罰"罪"苦"　090
伏惟尚饗　091
除服祭　　妻父母亡夫弔答辭　⑥　092
維年月朔日孤子某等謹　　凶釁無常　丈人(丈母)傾　093
以庶羞之奠敢昭告于亡　⑯　　背攀慕擗標荼毒　094
考之靈某等不孝罪深不能　　貫割哀"苦"奈"何"答云　095
隨歿玄運遄速奄及三周　　耶孃違和冀漸瘳豫　096
攀慕恩慈昊天罔極禮制　　何圖不蒙靈祐奄遘　097
有限不敢獨違以明旦吉辰　　凶釁追慕無及觸目號　098
修從禮制號天叩地不勝摧　　絶酷"痛"罪"苦"　099
絶伏惟　尚饗　100
父祭子　101
某年月朔日告汝某之靈吾　　舅姑亡父母弔答辭　102

092　　但云服前　　月日
093　　題如吉
094
095　18　妻亡弔丈人母書
096　月日名頓首頓首凶故無恒次娘子疾疹冀其痊
097　復何圖不祐以某月日奄遘凶釁悲慟貫楚
098　不自勝任伏惟聞問悲慟痛"當"奈"何"仲秋漸
099　涼伏惟　丈人丈母尊體動止友福某未由拜洩
100　伏增悲戀謹附白疏慘愴不次姓名頓首
101　　題如吉竝無謹封　　月日
102
103
104　答書　　不意凶衰
105　次娘喪逝悲慟貫割難以爲懷相視偏露倍增
106　傷悼痛苦深晚伏欝蒸敬想清祐辱月日慰
107　但增悲係謹遣還答慘愴不次姓名　月日
108　　題如前
109
110　9　外生亡弔姉書
111　月日名言凶故無恒　某乙夭逝聞問悲悼不自勝
112　任伏惟　貫割號楚哀悼奈何季冬極寒伏惟
113　動止友豫未由拜洩伏增悲戀謹奉白疏慘
114　愴不次名再拜　　月日
115　　題如前
116　答書
117　不意凶衰　某乙夭逝喪貫割痛楚難以爲懷
118　念汝渭陽悲悼何極時寒念佳吉吾友常
119　得月日書倍增號楚遣書慘愴不次次姉告
120　某　　月日　　題如前
121
122　弔姪書

門凶衰鍾禍及汝念汝早喪　凶釁無常　阿翁傾背攀　103
悲慟傷神龜筮叶從殯用　慕擗標荼毒貫割哀"　104
今日蹡酒于地汝當歆饗　苦"奈"何"　答云　105
之禮爲汝設祭汝歆饗　圖凶禍　先舅姑傾背　106
夫祭婦　攀號無及觸目糜潰酷　107
年月朔日官位姓名以清酌庶　"罰"罪"苦"　108
羞之奠敬祭于某氏次娘子之　109
靈卿移夫事天十有餘歲貞　110
孝頗有侍執無虧彼蒼不祐　男女亡舅姑父母弔　⑧　111
延禍及之俄歸夜天奄從逝　不意凶衰　某乙夭喪號　112
水將即玄壤龜兆叶從慟哭神　慟貫割悲痛奈何　113
兮降趾　答云　某盛年冀其成立何　114
婦祭夫　圖薄福奄鍾此禍悲"悼"　115
維年月朔日某氏新婦以少牢　痛"苦"　116
之奠敬祭于　故官位次郎之靈　117
兒門族寒微會蒙侍執雖　118
闕如賓之禮冀保同穴之榮　三歲已下弔辭　119
何期凶釁所鍾忽爲今古日月　孩子夭逝去離懷抱悲念奈　120
迅速奄及大祥疾首痛心未　何　121
已人也奠慈幽解明神式昭尚饗　122
祭兄　⑫　答云　123
維年月朔日名謹以清酌之　某盛年冀其成立何圖　124
奠敢昭告于　次哥之靈與兄　薄福奄鍾此禍悲"悼"痛　125
弟天倫連枝共氣何圖凶釁　"苦"　126
奄即奠祭長辭不勝號楚伏惟　127
尚饗　128
祭姊　三歲已上十五已下弔辭　129
維年月朔日名謹以庶羞之　禍出不圖　130
奠敢昭告于　某姊之靈惟　賢郎盛年殞逝悲痛奈何　⑪　131
靈與某同氣相依周官已傳不　132
墜先業即適他族謂保終榮　答同前　133
何圖積善無徵奄從玄壤日月　合靈祭　134
遄速忽至今時謹獻庶羞之奠　135
祭男冥　年月朔日吾告某婿某女之靈　136
年月朔日吾告汝名之靈汝　汝等不孝早亡同歸玄壤禮　137
不孝早亡潛曀玄壤靈神壙　制難越二靈合筵善自邕以　138

123 不意凶故　　某乙夭喪悲悼傷痛難以爲懷念
124 汝割裂恩慈號慟何極奈"何"時寒念汝無
125 橫未即集洩但多悲念遣書慘愴不次"哥告
126 某氏妹
127 ④　　答書
128 月日某氏妹次娘言不圖凶衰某乙夭喪貫割號楚痛
129 悼難任伏惟悲念奈何悲痛奈何仲冬已寒伏惟
130 哥姉尊體動止萬福未由拜訴伏增悲戀謹奉白
131 書慘愴不次"娘再拜

（末尾）

01 冥婚書　　題如吉法
02
03 某 頓 首 頓 首 仰 與 臭 味 如 蘭 通 家 自
04 又 承 賢 女 長 及 載 笄 淑 範 夙 芳 芳 金 聲 早
05 以 禮 詞 亦 云 請 願 敬 宜 謹 遣 白 書 不 具
06 答冥婚書
07 久 闕 祗 叙 延 佇 成 勞 積 德 不 弘 疊 鍾
08 牘 既 辱 來 貺 敢 以 敬 從 願 珍 重 亦 云 厚 謹

匹冥禮視同今汝娉某氏爲	保終始男女某乙等爲汝設祭	139
婚以保榮匹謂汝設祭魂兮	魂兮歆饗	140
歆之	題旌文	141
	維太歲某辰某月某日具官郡	142
祭女冥婚	縣鄉里姓名府君之神旌徐	143
年月朔日吾告汝名之靈汝	廣云今時人題旌或多不安年號	144
不孝早亡生無伉儷當就	但安郡而已若妻亡從夫之爵妾	145
凶禮尅用今時適與某郎	從子之位某夫人之神旌凡家長已	146
以保榮匹好修婦禮謹事	上或身長等喪埋冢克葬日訖	147
他門爲汝設祭汝當尚饗	即于家内廳事及堂居苫前隨 (19)	148
	便安旌樹旌于東階樹旌于西階	149
	者表主人有喪旌者明亡人有官	150
		（末尾）
昔平生之日思展好仇積善無徵苗而不秀		03
振春花未發秋葉已凋賢與不賢眷言增感曹氏謹		04
姓名頓首		05
		06
己女賢子含章挺秀竹頸松貞未展九能先悲百		07
還白書不具姓名頓首頓首		08